鳥取県西部地震展示交流センターで取材。左から福井（ふくい）さん、杉原（すぎはら）さん、松田（まつだ）さん、山下（やました）さん

震災をきっかけに育まれた、地域のつながり

～日野ボランティア・ネットワーク～

鳥取県西部地震※(1)をきっかけにつながった、地域に住む人を見守り、見守られる訪問活動。日野ボランティア・ネットワークの活動について、メンバーのみなさんにお話を伺いました。

偶然が必然に

鳥取県日野郡日野町は、岡山県・島根県との県境に近い、山あいの町。この町が、日野ボランティア・ネットワーク（以下、「ひのぼらねっと」という）の活動拠点です。

昨年からひのぼらねっとの２代目代表を務めるのは、鹿児島県出身の山下弘彦（やましたひろひこ）さん。旅の途中で鳥取県西部地震に遭遇した山下さんは、地震発生から一か月後に、テレビで日野町のボランティアが足りないことを知り、災害ボランティアセンターに連絡しました。「実は初めて災害ボランティアに参加したんですよ。東京での仕事を辞めて、たまたま旅の途中で。米子駅で食事をしていたんです。あの時、揺れを経験していなかったら、参加しなかったんじゃないかな」と当時を振り返ります。「よく、『どうして移住されたんですか?』って聞かれるんですけど、移住した感覚はなくて。どちらかというと、ボランティアに参加した後も被災後の調査や報告書の作成で日野町を行き来するうちに、居ついてたという感じ。やることがいっぱいあったんですよね」と笑います。

そんな山下さんと一緒に話をしてくださったのは、結成当初から事務局長を務める松田暢子（まつだのぶこ）さん。松田さんは地震直後にできた災害ボランティアセンターで、ボランティアの受け入れを担当していました。「地震直後は、全国からボランティアがどっと押し寄せるように来てくれる。でも一か月後は、だんだんと帰ってしまう時期で。ブルーシートを張ったところが風でめくれてたり、することが山ほどあるのに人手が足らない時期だったから、山下さんが来てくださって本当にありがたかったです」と話します。

松田さんや山下さんたちは被災後の調査を行っていく中で、「高齢化の進む日野町を、誰もが気軽に助け合い、見守り見守られ、安心感を持てる地域にしたい」という強い思いが芽生えたそうです。そうしてボランティアでつながった人を中心に声をかけ、平成13年に、ひのぼらねっとを立ち上げました。

ひのぼらねっとでは、鳥取県西部地震の経験を伝え、防減災活動の取組支援を行いながら、日野町で75歳以上の高齢者の家を、誕生日プレゼントを持って訪問し、困りごとがないか確認する活動をしています。

※（1）鳥取県西部地震

平成12年10月６日、鳥取県西部を震源とする、マグニチュード7.3の地震が発生。鳥取県西部を中心に、県内各地、岡山県、島根県にも甚大な被害をもたらしました。日野町は、この地震で最大震度６強を観測しましたが、近所の人による気付きや声かけ等もあり、死者はありませんでした。

ひのぼらねっとの事務所がある鳥取県西部地震展示交流センター。常時、地震や防災に関するパネルや資料が展示してあり、誰でも訪れることができます。

キーワードは「つながり」

ひのぼらねっとの訪問活動には、友達を連れてきたり、子どもを連れてきたり、参加したい人はいつでも参加できます。また、プレゼントづくりに関わってもらうことで、ボランティアに参加していると実感してもらうなど、訪問以外でも活動の場を広げ、いろいろな人がつながる工夫をしています。

さらに、町外からも災害を経験したり、災害復興の支援をしたことがある人などが「ひのぼらねっとの活動を参考にしたい」と訪問活動に参加されることも。その場合は、社会福祉協議会の元職員や、看護師など経験豊かなメンバーと一緒に活動してもらいながら、活動の趣旨やどういう経緯で始まったかなどを伝えます。このことがメンバー自身の気付きや活動の捉え直しの機会にもなっています。

20年で培った、受け入れられる存在

訪問活動の目的は、日常の困っていることを聞き、福祉機関や近所の見守り等につなげて課題を解決することなどをとおして、助け合える関係を作ること。また、実際に高齢者一人ひとりの家を訪問するため、地域の課題を把握できるというメリットもあります。「年配の人たちは、自分で何とか解決しなきゃっていう思いが強い。人に迷惑をかけちゃいけないっていうのが染み付いている。その垣根が徐々に取れてきた」と話す松田さん。「知らない人は警戒され、ましてや、家に上がらせてもらうことは、すごく難しいこと。それができるのは、ひのぼらねっとがいろんな機関と連携し、活動を継続してきたから」と続けます。20年前は「あんたらに見てもらわんでも、自分らのことは自分でするわ」と言っていた人が、今では待っていてくれるようになったというエピソードも。「年齢を重ねると、家でお祝いをしてもらう機会も少なくなる。孫や親戚が離れて暮らしていても、贈り物が届く人もいれば、そうでない人もいる。お祝いをすることだけでもとても嬉しいことなんじゃないかって話になって」と訪問活動のきっかけについて振り返ります。

見守り、見守られて

70代の人が、元気に畑仕事をする90歳の人を訪問した際には、「自分もああなりたい！」と、勇気づけられて帰ってくることも。「見守りに行ってるんだか、見守ってもらいに行ってるんだか、わからなくなる感覚もあって。でもそうやって、なにかをするわけじゃなくても、お互いのことを気にかけることが、助け合いにつながっているんです」と山下さん。

支えたり支えられたり、ボランティア意識を他の人に広めたり、地域の事に協力してくれるようになったり。この町には20年で着実に育まれてきた「つながり」があります。

活動についてのコメント

メンバーの杉原和江（すぎはらかずえ）さん
（活動歴12年）

私は、仕事で学んだことをボランティアで活かせたらと思い、この活動に参加しました。訪問活動は誕生月にするので、受ける側にとっては年に一回。でも、前年度の様子を記録しているんですよ。体調が優れなかったとか、入院していたとかが書いてあると、翌年行くときに「お身体の調子はいかがですか?」って話題にすることができたり、運転免許を返納していたら、どうやって病院に通っとられるかとか、大切なところにも目を向けられる。だから、記録を取るのはとても重要なんですよ。

これまでこの活動をやめなかったのは、中心になってやってくれる山下さんと松田さんが「無理しなくてもいいよ、来れるときで」って言ってくれるから。安心して所属できるっていうのは大きな魅力。ここは居心地がいいんですよね。

誕生日訪問のプレゼント例

地元の食文化を伝承する団体が用意した、ちらし寿司

鳥取県立日野高等学校の生徒が作成したシトラスリボン※(2)

メンバー手作りの立体バースデーカード

開くと

プレゼントは毎月、町内のさまざまな団体に作成を依頼。食べ物やマグカップ、ランチョンマット、木工小物入れなど種類は豊富で、手作りの真心がこもったものばかり。月によってはメンバーもプレゼント作りに挑戦します！

バースデーカードの下には、困ったことがあったらすぐに電話できるよう、ボランティアセンターの電話番号が書いてあります。

※(2) シトラスリボン…新型コロナウイルス感染症の患者やその家族、医療従事者、エッセンシャルワーカーなどへの、新型コロナウイルス感染症に関する差別や偏見の防止を目的とする「シトラスリボンプロジェクト」のシンボル

誕生日訪問の流れ

❶ 公民館に集合。班に分かれて訪問先を確認し、カードの裏面に訪問者の名前を記入（訪問したメンバーの名前を覚えてもらうことができ、思い出も生まれます。）

❷ 昨年の様子を確認してから訪問

❸ 訪問先でプレゼントの説明をしながら渡す。近況や困っていることを確認

❹ 公民館に戻り、訪問先で気付いたこと、変化等を班ごとに振り返りシートに記入

❺ 山下さん、松田さんら聞き取り担当と振り返りシートを確認

連絡先

日野ボランティア・ネットワーク

〒689-4503　日野郡日野町根雨130-1
日野町山村開発センター　2階
鳥取県西部地震展示交流センター
ホームページ　http://www.hinovnet.org
電話（FAX 兼用）0859-72-2220
メールアドレス　hinovnet@ybb.ne.jp

ホームページ QR コード